



ベルリン日独センター事務総長就任にあたり

ユリア・ミュンヒ (Dr. Julia MÜNCH)

長年にわたり私はベルリン日独センターの活動を追ってきましたが、その事業の質と多様性、また、国際的な出会いを通じて様々な形で日独相互理解に貢献できる可能性故にベルリン日独センターを高く評価してきました。だからこそ、2020年10月1日付けで事務総長に任命されたことを極めて光栄なものと捉え、この先待ち受けているエキサイティングな課題を楽しみにしています。すでにこの場をお借りして、今後皆様方から賜るであろうご信頼とご支援に感謝申し上げます。



1985年に設立されて以来、ベルリン日独センターの事業を取り巻く環境は大きく変化しました。設立当初は何よりも日本と当時の西ドイツの二国間対話の場を提供していましたが、時とともにグローバルなネットワーク化が進み、現在ではビジネス、学術・科学、文化、政治だけでなく、市民社会も含む様々なレベルにおいて緊密に連携しています。また両国合わせて100を超える日独協会・独日協会があり、企業、大学、学校、スポーツ、音楽シーンやアートシーン、友好都市・姉妹都市の間でも活発な交流がみられるようになりました。

不透明な政治、不安定な世界秩序、保護主義が世界的に広まりつつある現代においては価値観を共有する日独の連携は以前にも増して重要な役割を果たすと考えます。新型コロナウイルス・パンデミックの影響に対する適切な対処方法、グローバルな

パワーシフト、地球温暖化、高齢化社会、新しいワークスタイルを可能にする労働環境などをはじめとする喫緊の課題に関する包括的な解答をみつめるには両国が協力する以外の術がないと確信し、そうすることによって多くの分野でともに学び合い、相互に学び合うことができると思います。

ベルリン日独センターは貴重な人脈を有しており、人々が直接出会うための(物理的な)場所として、また今後はますます(デジタル)プラットフォームとして事業を実施すべく特別な責任を担っています。私自身、ベルリン日独センターの課題は情報を提供し、意見形成を促進し、新たなつながりを生み出すことで日独関係を強化することと認識しています。ベルリン日独センターはまた、とりわけ若手世代(すなわち、未来の意思決定者)の相手国に対する関心を喚起し、理解を深め、可能性を示し、将来

的協力のための信頼の資本を構築することに心血を注いでいます。そのため、2021年もデジタル会議、ハイブリッド会議、リアル会議、人的交流事業、コンサート、展覧会、図書館事業、日本語講座をはじめ多彩な事業を企画しています。

目次

巻頭記事 就任にあたり ユリア・ミュンヒ	1~2
会議報告 「ニューノーマル」	3
人的交流事業 ヤングリーダーズフォーラム	4
その他の事業報告	5
2021年事業案内	6~7
2021年展覧会案内	8

しかしながら、新型コロナウイルス・パンデミックによって引き起こされた特殊な状況下では人と人が出会ったり渡航する可能性が極端に制限されているため、早急に新たな手を打つ必要性があります。それと同時に、低金利環境がつづき資産運用が難しいにもかかわらず家屋・設備等への投資が急務となっている状況下においてベルリン日独センターは難局に直面しています。そのため、ベルリン日独センター全体理事会および評議会は夏に組織変革のプロセスに着手した次第です。

このような背景のもと、私はベルリン日独センター事務総長として全体理事会理事および評議会評議員と連携し、副事務総長および全社員と緊密に協力しながら、財団の目的に沿ったベルリン日独センターの戦略的方向性をさらに発展させ、将来性のある組織を確立し、事業のポートフォリオに新たなアクセントを加えるために全力を尽くしたいと考えています。

- ひとつの目標は、外部機関の事業や活動との相乗効果を意識的に追求することを通じて数多い既存の日独間の取り組みの発信力を強化することです。
- ベルリン日独センターは日独トピック特定のためのハブ(終点ではなく)として、ひとつひとつの事業を実施するだけでなく、機関やグループ間の継続的な交流を確立していきたいと考えています。その際、対話の姿勢を積極的に打ち出し、日本ないしドイツに普段焦点をあわせていない機関や人々に積極的にアプローチします。
- ベルリン日独センターの事業では、バーチャル空間を積極的に取り込みます。もちろん、ウェブ開催の事業は人と人との出会いを代替することはできませんが、参

加者層を居住地を問わずに飛躍的に広げられることや、ドイツと日本の異なる場所にいるプレーヤーを簡単に取り込むことができるという利点があります。また、分散型の交流形態とソーシャルメディアにおける高いプレゼンスを通じて特に若者をベルリン日独センターが提供する対話に持続的に取り込むことができます。

- また、ベルリン・ダーレム地区にある多彩な利用方法のある建物を、外部の方々にもご活用いただける場所として一層開放したいと考えています。そのために、独創的なビジネスモデルや協力モデルを現在開発中です。

最後になりましたが、簡単に自己紹介いたします。ゲッティンゲン大学とボン大学で日本学、経営学、心理学を学んだ後、最初に東アジアにおけるドイツ人インターンシップ仲介プラットフォームKOPRAの立ち上げを任せられました(2004年～2009年)。その後、日独産業協会(DJW)専任事務局長に就任し(2007年～2020年)、名誉職として現在も独日文化交流育英会(2009年～)、全国独日協会連合会(2016年～)、全国独日協会連合財団(2018年～)の理事をつとめています。2016年にデュースブルク・エッセン大学のメルカトル経営大学院で博士号を取得しました。最近、家族5人でベルリンに引っ越してきたばかりです。

状況が許し次第、皆様方をここベルリン日独センターにお迎えできれば嬉しく存じます。今後の変革プロセスに関してご提案があれば、ご連絡ください。皆様方のご意見、心待ちにしております。

「jdzb echo」読者の皆様

2020年は世界中がコロナ危機と戦い、終息への道を探りつづける一年となってしまいました。読者の皆様におかれては元気に毎日をお過ごしのことと思います。当ベルリン日独センターでもコロナ対策に明け暮れ、また新しい事業形態をさぐる試行錯誤の年でした。

しかし、喜ばしいこともありました。新しい事務総長を迎えたのです!今号の巻頭記事はミュンヒ事務総長が自己紹介し、抱負を語ります。国際政治が不安定で世界秩序が揺らぐ今、ベルリン日独センターも変革期を迎えており、新指針のもと、日独関係の強化、国際関係の安定に貢献してまいりたく存じます。

夏のオープンハウスや秋からのシンポジウム・講演会はオンラインによる事業となりましたが、コロナ危機対応事業には大きなメリットもあることが分かりました。懸案だった事業のストーリーミングが自然と実現しました。講師や聴衆の皆様にはベルリン日独センターにおいていただく必要なく、事業に参加いただけることになりました。世界中から、それもマスクなしで。そのため秋の事業には日本を始めとして今までより多くの参加を得ることができました。

それでも、ビデオ会議は実際に会ってのコミュニケーションに完全に替わることはできないと感じます。来年の日独160周年を多くのリアルな記念事業で祝えることを願っています。

皆様どうぞ健やかなクリスマスと新年をお迎えますよう。

清田とき子

ベルリン日独センター副事務総長

jdzb echo

ベルリン日独センター広報紙「jdzb echo」は四半期毎(3月、6月、9月、12月)に刊行されます。

発行 ベルリン日独センター(JDZB)
編集 ミハエル・ニーマン
(Michael NIEMANN)
E-Mail mniemann@jdzb.de

著者名が明記されている記事は著者の意見を反映するものであり、必ずしも編集部意見と一致するものではありません。

連絡先

Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)
Saargemünder Strasse 2, 14195 Berlin, Germany
Tel: +49-30-839 07 0 Fax: +49-30-839 07 220
E-Mail: jdzb@jdzb.de URL: <http://www.jdzb.de>

図書館は現在事前申し込みによる借出と返却のみ、火・水:午前11時～12時30分と13時～17時、木:午前10時～12時30分と13時～17時に可能です。

日独シンポジウム「The »New Normal«. New Mobility and the Future of the City」(ニューノーマル——新しいモビリティと都市の未来) 報告(2020年8月24日、於ベルリン日独センター)

トーマス・プルス(Thomas PULS)、ドイツ経済研究所(IW、ケルン)

新型コロナウイルス・パンデミック終息後にニューノーマル(新しい常識・状況)が必要となるのか、それとも慣れ親しんだ常態への復帰があり得るのか。ドイツおよび日本の都市はコロナ禍後の課題にどのように対応していくことができるのか。これらの問題を取り上げたのがベルリン日独センター、富士通株式会社、ドイツ経済研究所が共催し、在独日本国大使館が支援した日独シンポジウムである。本シンポジウムがベルリン日独センターが開催する初のハイブリッド型の会議系事業であったことは、シンポジウム内容に実にマッチしていたと言える。と言うのも、ドイツ在のスピーカーはベルリンに集合し、日本在のスピーカーは Zoom (ビデオ会議ツール) 経由で参加したからである。また、一般参加者もビデオ会議に参加する形で、または Zoom のチャット機能を通じてスピーカーに質問を寄せることができた。シンポジウムは2部制で、学術・科学、経済・ビジネス、団体・連盟などで「ニューノーマル」を扱っている人が基調報告者として招聘された。シンポジウム冒頭の挨拶でベルリン日独センターの清田とき子副事務総長が会議系事業をデジタルで実施することによって生じる変化を説明し、これはベルリン日独センターの財団としての目的遂行における新たなチャンスでもあると強調した。

モビリティの問題に焦点をあわせた第一部ではフベルトウス・バールト(Dr. Hubertus BARDT、ドイツ経済研究所所長兼経済部長)が司会を務め、導入のスピーチで自動車産業の経済的意義を取り上げ、業界が直面する課題を指摘した。

第一部の最初の基調報告者はヘルムホルツ環境研究センターのライムント・シュヴァルツェ(Dr. Reimund SCHWARZE)で、「グレート・リセット」(根本的変革、転換)を主要テーマに据えることで、以前の常態への復帰はあり得ないという見解を示した。シュヴァルツェの基調報告の中心テーマは「健康な都市」であり、これと密接に関連するのが不平等問題である。というのも、パンデミックを通じて社会環境と健康の関連性が浮き彫りになったからである。シュヴァルツェはまた、真の意味での景気回復はグリーン成長(経済成長を実現しつつ暮らしを支える自然資源・環境の恵みを受つづけること)でのみ実現可能であると述べた。

つづいて、自動車業界代表としてクリスティアン・シェール(Dr. Christian SCHEEL、ドイツ自動車工業会常務理事)およびアクセル・ノルディカー(Axel NORDIEKER、トヨタファイナンス

シャルサービス常務理事)が基調報告を発表した。両者ともに、自動車業界がコロナ禍以前にすでに変遷過程にあったことを強調した。とりわけ、2050年までに運輸セクターの脱炭素化をほぼ達成すべしという要件により変化が推進され、なかでもアーバンモビリティ(都市交通)の要件を満たす努力が重要なファクターであったとした。シェールの基調報告では、すでに始まっている車両技術の変化と都市インフラへの統合に焦点があわせられ、電気自動車や自律走行技術には、そのための環境づくりが必要であると説明された。ノルディカーもこの関連性を強調し、これを、自動車メーカーからモビリティプロバイダーへの発展というビジョンの文脈に位置づけた。トヨタ社はあらゆるモノやサービスがつながる実証都市「コネクティッド・シティ」を静岡県に設置し、「Woven City」(ウーブン・シティ)と命名しているが、ノルディカーも環境と社会経済の両方に配慮したコネクティッド・シェアリングコミュニティの設立を目指すブレス(BREATHE)プロジェクトを手掛けている。どちらも、モビリティプロバイダーの立場からのインフラ整備牽引構想である。

第2部は、「ニューノーマル」が未来の都市に与え得る影響に焦点をあわせた。司会は、東京からビデオ参加したマーティン・シュルツ(Dr. Martin SCHULZ、富士通株式会社チーフポリシーエコノミスト)が担当し、導入スピーチにおいて、都市部の労働環境の変遷規模を富士通を例に提示した。すなわち、労働のデジタル化はすでに追い風を受けており、これが大都市圏における空間利用およびモビリティに永続的な影響を及ぼすとし、新しい

ワークライフバランスが「ニューノーマル」の中心的要素になるとの期待を表明した。都市社会にとって「ニューノーマル」が何を意味するかというトピックは、原山優子(理化学研究所理事)の基調報告でも取り上げられた。原山は、これまで特徴的だった社会的動向が、今ではどの範囲まで疑問視されなければならないのか調査し、パンデミックの経験を通じて新しい行動様式を促進しなければならないと説明した。なかでも、デジタル化の進展と地域コミュニティの強化が必要だが、そのためのインフラも必要であり、最終的にはスマートシティが必要不可欠となると結んだ。

ここで、アラヌス・フォン＝ラデッキ(Dr. Alanus von RADECKI、フ라운ホーファー応用研究振興協会所属労働経済・組織研究所)がスマートシティコンセプトを実際に実現させるイニシアチブ、すなわち、フ라운ホーファー応用研究振興協会が都市や産業界と連携しつつスマートシティ関連研究の成果の実用化を促進する「モルゲンシュタトー未来の都市イニシアチブ」を紹介したが、なかでもデータ主権に重点を置いたプレゼンテーションだった。

第2部の三人目の基調報告者中島康介(三井物産株式会社、ニューダウストリーム事業部バッテリーソリューション室、室長)は、eモビリティのバリューチェーンに沿った三井物産の投資戦略——まず最初は電気自動車の小規模メーカーに投資することで、投資者の立場から供給・サービス分野でビジネスモデルを開発する戦略——を紹介した。

最後に、チャットで質問を寄せてきた参加者との活発な議論を経て、本シンポジウムは閉会となった。

本シンポジウム動画は、次のリンクから閲覧いただけます：<https://www.youtube.com/watch?v=sTmgTjXb04U&t=93s>



第15回日独ヤングリーダーズフォーラム(2020年～2021年)バーチャルキックオフイベント、2020年8月30日

2020年8月28日から9月6日まで「豊かな高齢社会のデザイン——若者の視点」をテーマに開催を予定していた第15回日独ヤングリーダーズフォーラムは、新型コロナウイルス・パンデミックの影響で残念ながら来年に延期となりました。しかし、日独各々8名、計16名のヤングリーダーズがフォーラム参加を非常に楽しみにしていたため、ベルリン日独センターはバーチャルなキックオフイベントを開催することにし、8月30日の日曜日、ドイツ時間の午前中、日本時間の夕方に16名のヤングリーダーズおよびフォーラム・サマースクール校長のハーラルト・コンラート教授(Prof. Dr. Harald CONRAD、デュッセルドルフ・ハインリッヒ・ハイネ大学現代日本学部教授)ならびにベルリン日独センタースタッフがウェブ会議で「出会い」、開会の挨拶、各自自己紹介、「豊かな高齢社会のデザイン」に関する導入講演というプログラムで約3時間ほどともに過ごしました。2021年には是非リアルで会えることを楽しみにしています!

スヴェン・トゥラシェフスキ (Sven TRASCHEWSKI)
ベルリン日独センター、日独ヤングリーダーズフォーラム主任



高齢化社会は先進国が抱える主要課題のひとつであり、なかでも日本およびドイツにとっては大きな課題となっています。最初もっばら社会経済的な課題として捉えられていた高齢化社会ですが、精査の過程で多種多様な側面が明らかになりました。したがって、社会がこの課題にどのように立ち向かうかは政治決定のあらゆる次元に影響することになります。そしてまた、民主主義の発展傾向や、社会規範や価値観の変容を形成する方法をも規定することになるでしょう。

日独の社会はともに高齢化しており、今後の課題に対応していく方法は、地域社会として決断しなければなりません。私は政党財団に勤務しており、日頃このようなテーマに接し、「相互に学ぶことはなにか」「他国の解決策から自国のために導き出せるヒントはなにか」ということを常に考えています。だからこそ、それぞれ異なる背景や考え方もつヤングリーダーズ仲間の皆さんと一緒にこれらの問題を議論し、ドイツおよび日本にとって役立つ可能性のある解決策やアイデアを交換し、そうして得られた知見を日常の業務に活かしてゆけることを期待しています。

ゾエ・ファン＝ドールン (Zoë van DOREN)
フリードリヒ・ナウマン財団、アジアデスクチーフ

少子高齢化問題は親の老後、社会保障制度の持続性などとても身近な問題でありながらも正直なところ深く考えたことがありませんでした。私は2020年1月末迄インドネシアのジャカルタに駐在しており、平均年齢も若く人口ボーナスがつづくインドネシアと異なり、日本に帰ってきてからは日常生活でも高齢化社会を実感し、先の長い若い世代こそしっかりと考えて、社会を変えていかないと感じないようにしました。そのような時に会社経由で日独ヤングリーダーズフォーラムの公募を知り、ぜひ参加してみたいと思い応募しました。

フォーラムでは社会の様々な要因が関連する問題に対して問題解決のアプローチを見出してゆき、またその先の新たな起こり得る問題を考え、解決策を提案していく力を身に付けたいと考えています。少子高齢化社会問題は先進国においてはグローバルなトレンドになっており、今後同様の問題を抱えていく国々においてもモデルとすべき問題解決に向けた提案を仲間とともに見いだせば幸いです。新型コロナウイルスの影響でフォーラム開催は2021年に延期となりましたがグループワークやイベントを通じて日本、ドイツのヤングリーダーズとのネットワークを構築できることもとても楽しみです。

有間友祐
株式会社日立製作所営業統括本部、主任

会議系事業

国際社会における日独の 共同責任

1.5トラック(官民対話)形式で実施する 「日独安全保障ワークショップ」

協力機関:独連邦外務省(ベルリン)、
日本国外務省(東京)、コンラート・ア
デナウアー財団(ベルリン)、日本国際
問題研究所(東京)

開催予定日:2021年5月

日独シンポジウム「グローバルヘル スⅣ」

協力機関:国立国際医療研究センター
(NCGM、東京)、早稲田大学、アレ
クサンダー・フォン・フンボルト大学
(ベルリン)、ハイデルベルク大学・ハイ
デルベルク・グローバルヘルス研究所
開催予定日:2021年未定、東京開催

国際(独日尼)会議「海洋安全保障」

協力機関:独連邦外務省(ベルリン)、
ドイツ、日本、インドネシアのシンク
タンク機関

開催予定日:2021年未定、ジャカルタ
市開催

日独シンポジウム「変遷する国際秩序 における日本とドイツの役割」

協力機関:コンラート・アデナウアー
財団(ボン)、ドイツ国際安全保障研
究所(SWP、ベルリン)、一般財団法人
アジア・パシフィック・イニシアティ
ブ(API、東京)

開催予定日:2021年未定、東京開催

持続可能性および環境

日独エネルギー変革評議会(GJET C)第10回委員会議

協力機関:ヘンニッケ・コンサルト(ヴ
ッパータール)、エコス・コンサルティ
ング&リサーチ(オスナブリュック)、日本
エネルギー経済研究所(東京)、独連邦
経済エネルギー省(ベルリン)、日本国
経済産業省(東京)

開催予定日:2021年3月12日

日独シンポジウム「バイオエコノミー」

協力機関:ドイツ語圏日本学術振興会
研究者同窓会(ボン)

開催予定日:2021年5月7日~8日

日独シンポジウム「持続可能性にお けるデジタル化の役割」

協力機関:イーコンセンス・ドイツビジ
ネス界の持続可能な発展のためのフォー
ラム(ベルリン)、ドイツ経済研究所(I
W、ケルン)、富士通株式会社(東京)、経
済広報センター(東京)照会中

開催予定日:2021年10月、東京開催

少子高齢化社会

日独シンポジウム「少子高齢化対 策——日独の事例」

協力機関:独連邦家庭高齢者女性青
年省(ベルリン)、日本国厚生労働省
(東京)

開催予定日:2021年未定、東京開催

日独会議:「日独コミュニティの高 齢化および地元における介護」

協力機関:ドイツ日本研究所(東京)、フ
リードリヒ・エーベルト財団東京事務所

開催予定日:2021年下半年期、東京開催

デジタル化の進む社会

日独会議「労働の未来とデジタル化」

協力機関:信州大学(長野)、フラウン
ホーファー応用研究振興協会通信技
術研究所所属ドイツ産業技術研究大
使ネットワーク(GRANITE)(ザ
ント・アウグスチン)

開催予定日:2021年5月中旬

日独会議「人工知能と人間——科学と フィクションにおけるイメージ」

協力機関:アレクサンダー・フォン・フ
ンボルト=インターネット社会研究所
(HIG、ベルリン)、早稲田大学

開催予定日:2021年6月17日~18日

日本に関する独仏会議Ⅱ

協力機関:フランス国立社会科学高等
研究院付属仏日基金(パリ)、デュース
ブルク・エッセン大学

開催予定日:2021年9月、東京開催

日独会議「人工知能が法曹界および法 規範に及ぼす影響」

協力機関:独日法律家協会(ハンブ
ルグ)

開催予定日:2021年秋、東京開催

国家、企業、ガバナンス

日独シンポジウム「クライシス・コミュ ニケーション」

協力機関:国際交流基金(東京)

開催予定日:2020年2月4日

国際会議「エネルギー、政治、社会 ——東日本大震災から10年間の継続 と変化」

協力機関:ドイツ現代日本社会科学
学会(VSJF)

開催予定日:2021年3月19日

日独パネルディスカッション「2020年 オリンピック競技大会——大規模ス ポーツイベントの社会的・政治的・経 済的意義」

協力機関:ドイツ日本研究所(東京)

開催予定日:2021年4月15日

日独会議「民主主義の未来Ⅰ」

協力機関:西南学院大学(福岡)、デュ
ースブルク・エッセン大学、フリードリヒ
・エーベルト財団(ベルリン)

開催予定日:2021年8月31日

日独シンポジウム「革新力としてのダ イバーシティ——ダイバーシティの革 新的な推進」

協力機関ドイツ科学・イノベーション
フォーラム(DWIH、東京)

開催予定日:2021年未定、東京開催

日独会議「Shaping Institutional Profiles in Research, Teaching and Community Engagement」(研究、教 授、コミュニティ活動を通じた大学のプ ロフィール形成)

協力機関:ドイツ大学学長会議(ボン)、
国立私立大学団体国際交流担当委員
長協議会(東京)

開催予定日:2021年未定

日独シンポジウム「スポーツ法」
協力機関：独日法律家協会(ハンブルク)
開催予定日：2021年未定、ミュンヘン開催

文化と変遷

建築対談シリーズ「ラディカルにモダニズム的」
協力機関：ドイツ建築家連盟(ベルリン)、ドルトムント工科大学、ベルリン工科大学
開催予定日：2021年未定

特別事業

日独会議「Moving Ahead with Gender Equality in Germany and Japan」(男女共同参画の前進)
協力機関：日本国外務省(東京)
開催予定日：2021年3月4日～5日

日独フォーラム第29回全体会議
協力機関：日本国際交流センター(東京)、独連邦外務省(ベルリン)、日本国外務省(東京)
開催予定日：2020年5月(非公開)

文化事業

展覧会

日独対話展「陰影もよう Stille Schatten 静かな影」
磯益子の平面造形作品とヴォルフ・カーレン(Wolf KAHLEN)によるインスタレーション
展示期間：2020年9月25日～2021年1月29日

「雨降って地固まる」
秋元尚美とクラウディア・シュマツケによるスカルプチャーとインスタレーション
展示期間：2021年2月19日～5月28日

新型コロナウイルス禍のため、本頁には2020年11月時の暫定的な事業企画を掲載いたしました。各事業の開催日等はウェブサイト www.jdzb.de でご確認ください。各事業の開催形式はコロナ禍の状況次第でリアル型、ウェブ型、ハイブリッド型(会場とオンラインのミックス)となります。

「おはよう お月様」
ニコール・アーラントのフォトグラフィーと廣畑まさみのガラスアート
展示期間：2021年8月～10月末

「theory of everything」
ヤマモトノリコとコルネリア・ホフマンによる平面作品とインスタレーション
展示期間：2021年11月～2022年1月

コンサート

新春コンサート「自然についての対話：日本ードイツ」
アンサンブル・ホリツォンテ
協力機関：ノルトライン＝ヴェストファーレン州芸術財団
開催予定日：2021年1月11日

「HERBSTLIED 秋の歌」
ユンゲ・ドイチェ・フィルハーモニー管弦楽団メンバーによる室内楽コンサート
協力機関：ユンゲ・ドイチェ・フィルハーモニーオーケストラ(フランクフルト)、ヴェルナー・ライマース財団(バードホンブルク)
開催予定日：2021年6月9日

現代音楽の曲室内楽コンサート
井上郷子(ピアノ)、マウリツィオ・バルベッティ(Maurizio BARBETTI、ビオラ)、ハルトムート・シュルツ(Hartmut SCHULZ、バリトン)
開催予定日：2021年10月22日

朗読会

「コンビニ人間」
村田沙耶香(2016年芥川賞作家)による朗読&トークイベント
協力機関：ケルン日本文化会館・国際交流基金
開催予定日：2021年3月1日

日本語講座

ベルリン日独センターは日本語を母語としない16歳以上の方々を対象とする日本語講座を開講しております。1月に始まる新学年は新型コロナウイルス・パンデミック下においてオンライン講座となりますが、可能になった時点で対面講座に戻ります。唯一上級講座(C1-2/CEFRまたはN2-1/JLPT)は年間を通してオンライン講座も平行して提供しつづけますので、ベルリン外在住の方で上級レベルを受講希望の方の受講も歓迎します。

書道講座

ベルリン日独センターは児童対象(6歳～15歳)および社会人対象(16歳以上)の書道講座を開講しています。一人ひとりの進捗に併せた課題を練習し、個々に添削いたしますので、好きな日だけ出席していただける形式で、国籍・母語・日本語学習歴を問わずどなたにも参加いただけます。現在少人数で事前予約により開催しています。

人的交流事業

- ・日独若手専門家交流
- ・日独ヤングリーダーズ・フォーラム
- ・日独青少年指導者セミナー
- ・日独勤労青年交流プログラム
- ・日独学生青年リーダー交流プログラム
- ・JDZB SCIENCE YOUTH PROGRAM

各プログラムの詳細はwww.jdzb.de → 人的交流事業

展覧会観覧時間

月曜日～木曜日10時～12時30分と13時～17時、金曜日10時～12時30分と13時～15時30分

文化事業の予約受付開始日はウェブサイトでご確認ください。

会場に関する記載のない場合はベルリン日独センターで開催します。詳しくは www.jdzb.de → 個別事業

「雨降って地固まる」

秋元尚美とクラウディア・シュマッケによるスカルプチャーとインスタレーション

両アーティストは物質（土、水）と非物質（光、動き）の現象をテーマに制作しています。秋元尚美はセラミックやドローイング作品を通して特に触感と物質性を探求し、クラウディア・シュマッケの彫刻、インスタレーションとビデオ作品では動きと一時的な現象がテーマの中心となっています。自然現象と取り組むことに重きを置く両者は、柔軟な形を探求するための素材として土を扱っている点も共通しています。本展覧会のために秋元尚美とクラウディア・シュマッケはこれまでに制作した作品のほかに、新作も展示する予定です。

展示期間：2021年2月19日～5月28日



写真左：„Phiole“ (Detail) by Claudia SCHMACKE, 2011 © Robert SCHEIPNER / 写真右：„ohne Titel“ by AKIMOTO Naomi, 2017 © KIM Do Hyun



「おはよう お月様」

ニコール・アーランドのフォトグラフィーと廣畑まさみのガラスアート

二人のアーティストによる建築的空間と静物をそれぞれテーマに捉えた作品群が感覚的経験と異文化交流の導入となって対話を織り成します。光と影、近くと遠く、異なるものと己のもの——の隔たりからは心通わせ思いをはせる瞬間が生まれます。

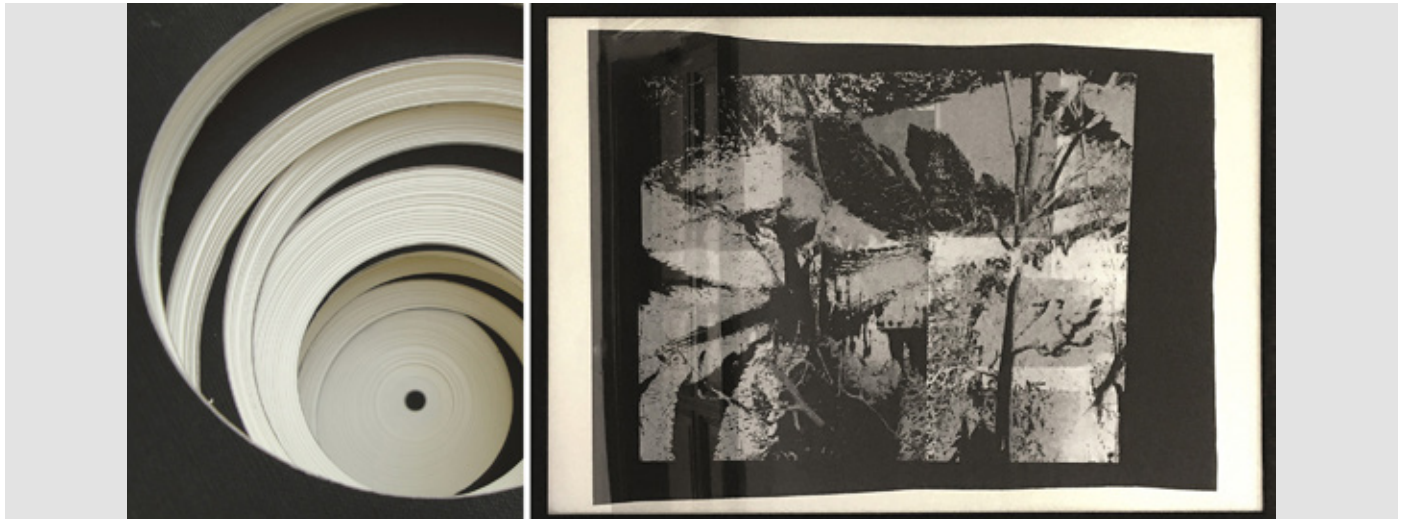
展示期間：2021年8月～10月末

写真左：„LichtRaum“ #7 by Nicole AHLAND, 2020 © N. AHLAND & VG Bild-Kunst, Bonn 2020
写真右：„Blue Flower #3“ by HIROHATA Masami, 2019 © HIROHATA M.

「theory of everything」ヤマモトノリコとコルネリア・ホフマンによる平面作品とインスタレーション

ブレーメン在住の二人のアーティストは、テーマ「theory of everything」のもと、作品を通して自分たちの疑問を追求します。本展では様々なメディアを使用してそれぞれが独自にテーマに取り組み、作品を対話させ、空間に即したインスタレーション作品で、内なる世界と外なる世界の現象への問いかけ、そして探求へと誘います。

展示期間：2021年11月～2022年1月



写真左：„Weltformel“ by YAMAMOTO Noriko, 2011-2018 © YAMAMOTO N. / 写真右：„Jenseits der Blätterränder“ by Kornelia HOFFMANN, 2019 © K. HOFFMANN